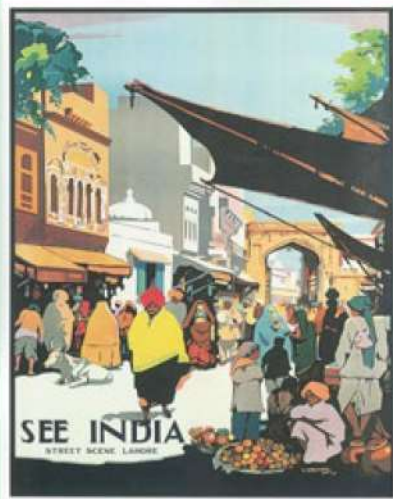


NO : 273  
2021/7

# パーキスターン



英領植民地期の観光と広告出版：  
アンティーク・ポスターで旅するパキスタン  
須永恵美子



パキスタンにおけるイスラーム宗教勢力 (2)  
松田和憲

パキスタンから見た「中国パキスタン関係」

松田邦紀

最近のインド・パキスタン情勢  
パキスタンから見た印パ停戦合意と  
その後の両国関係

進藤雄介



カラーチー潮騒記  
松田和憲

一枚の写真  
パキスタンのパールシー

中野勝一



かるたでつなぐ日本とパキスタン  
すぎなみ karuta プロジェクト

---

---

## ◆ 目 次 ◆

---

令和2年度協会決算承認報告 .....	(1)
英領植民地期の観光と広告出版： アンティーク・ポスターで旅するパキスタン.....	須永恵美子 (6)
パキスタンにおけるイスラーム宗教勢力 (2) .....	松田和憲 (11)
パキスタンから見た「中国パキスタン関係」 .....	松田邦紀 (15)
最近のインド・パキスタン情勢 パキスタンから見た印パ停戦合意とその後の両国関係.....	進藤雄介 (20)
カラーチー潮騒記 1 .....	松田和憲 (27)
かるたでつなぐ日本とパキスタン.....	すぎなみ karuta プロジェクト (31) (荻本和利、種岡祐子、高橋有美)
一枚の写真 パキスタンのパールスイー.....	中野勝一 (36)
人と食、それは愛。そしてパキスタン (その46).....	シャー真理子 (38)
2020-21年度のパキスタン自動車販売実績 .....	(39)
パキスタン・ニュース.....	(40)

---

---



## パキスタンにおけるイスラーム宗教勢力 (2)

### 松田和憲

#### 2020 年後半以降のパキスタンにおける宗教政党の動向

前回の寄稿から9ヶ月経過したが、その間にパキスタンのイスラーム宗教政党が注目を集めた2つの大きな動きがあったので、今回はそれらの動向について主に紹介する。

一つ目は2020年12月臨時号の中野勝一氏の記事で取り上げられていたように、2020年10月3日にデーオバンド系宗教政党のイスラーム・ウラマー党ファズルッラフマーン派(JUI-F)の党首であるファズルッラフマーン<sup>(1)</sup>が、パキスタン民主運動(PDM)の総裁に全会一致で選出されたことである。このPDMにはイスラーム・ウラマー党のほかに、バレールヴィー派系列のパキスタン・ウラマー党(Jamiat Ulama-e-Pakistan)、アフレ・ハディース派系列のアフレ・ハディース党(Jamiat Ahl-e Hadith)が参加しているが、イスラーム主義政党としてパキスタン国内で最も影響力のあるイスラーム党(Jamaat-e-Islami)やシーア派宗教政党が参加しておらず、イスラーム宗教諸政党の足並みはそろっていない<sup>(2)</sup>。



ファズルッラフマーン

(<https://www.pakpedia.pk/fazal-ur-rehman/>)

二つ目はバレールヴィー派系列の宗教政党であるラッバイク運動(Tahrik-e Labbaik Pakistan, TLP)のカリスマ的指導者、ハーディム・フサイン・リズヴィーの死去とTLPの政党としての活動禁止である。前回記したように同政党は冒涇法<sup>(3)</sup>廃止に反対する過激な一勢力として知られている。ハーディム・フサイン・リズヴィー<sup>(4)</sup>は2020年11月



(左) ハーディム・フサイン・リズヴィー ([https://en.wikipedia.org/wiki/Khadim\\_Hussain\\_Rizvi](https://en.wikipedia.org/wiki/Khadim_Hussain_Rizvi))

(右) ハーディム・フサイン・リズヴィーの葬儀礼拝に集まった人々 (<https://www.dawn.com/news/1591666>) 撮影: Murtaza Ali / White Star



19日に発熱と呼吸困難で亡くなった<sup>(5)</sup>。彼の死因が新型コロナウイルス感染症であったかどうかは不明であるが、この時期はパキスタンにおいて新型コロナウイルスの感染者が増加傾向にあり、2020年7月以来最多の水準



を更新していた<sup>(6)</sup>。彼の葬儀は翌日の11月20日にラーホールのバードシャーヒー・モスク近くにあるミナーレ・パークスタウンで執り行われ、約20万人が動員されたとされる<sup>(7)</sup>。彼の死後、TLPの党首（アミール）として彼の息子であるサアド・フサイン・リズヴィー（1994年生まれ）が選出された。ただし彼の選出にあたって、TLP内で彼の指導者としての資質を疑問視する声が上がっていた<sup>(8)</sup>。



サアド・フサイン・リズヴィー  
([https://en.wikipedia.org/wiki/Saad\\_Hussain\\_Rizvi](https://en.wikipedia.org/wiki/Saad_Hussain_Rizvi))

TLPが活動禁止処分になるきっかけとなる出来事は、ハーディム・フサイン・リズヴィーが亡くなる1か月前の10月16日にフランスで起きた。パリ近郊の中学校に勤務する教師が、チェチェン出身のムスリムの若者に学校の近くで首を切断された事件である<sup>(9)</sup>。この事件には「シャルリ・エブド」紙に掲載されたムハンマドの風刺画が深くかかわっている。10月21日、マクロン大統領が犠牲になった教師への追悼演説の中で「風刺画を諦めない」という発言を行い、これがもとで多くのムスリム国家ではフランス製品の不買運動や風刺画への抗議デモが起きた。TLPは11月15日にラーワルピンディーからイスラマバードまで行進することを発表した。パキスタン当局はコロナウイルス感染拡大防止を理由に中止するようTLPの指導者と交渉を行っていた<sup>(10)</sup>。11月14日に当局がTLPの指導者や活動家181人を拘束し、15日には機動隊と抗議者との衝突があったが、TLPと政府の間でフランス大使の追放を含めた要求について、3か月以内に実行するという合意がなされたため抗議行動を中止した。しかし、2021年2月にその期限が4月20日まで延ばされた。その期限が迫る1週間前の4月12日に党首のサアド・フサイン・リズヴィーの身柄が拘束されたことをきっかけにTLP指導者層が抗議活動を先導し、それが暴力沙汰になり、多くの死傷者を出した。そして4月15日に警察官の死者が4名になった時点で連邦政府がTLPを正式に禁止した。

以上、2つの宗教政党の最近の動向について簡単にまとめた。ファズルッラフマーンとJUI-FはPDMの反政府運動で注目を集めたものの、以前と比べて勢いを失っている。ただし今年の9月11日にアフガニスタンから米軍が完全撤退するため、その情勢次第では親タリバーンのファズルッラフマーンに今後注目が集まる可能性は十分にある。TLPは政党として活動停止処分となったが、冒涇法に関連した出来事があれば再び抗議運動が起こることは容易に推察できる。また欧米で預言者ムハンマドの風刺画問題が続く限り、TLPと同様の宗教組織が今後も登場する可能性は高いと筆者は考えている。

今回は南アジアにおけるイスラーム宗教政党前史及びデーオバンド派の形成について取り上げる。

（まつだ かずのり・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員）



- (1) 1953年生まれ。ハイバル・パフトゥンハー (KP) 州のデーラー・イスマール・ハーン出身のバシュトゥーン。KP州アコーラ・ハタック (Akora Khattak) のハッカーニーヤ学院 (Darul Uloom Haqqania) に学び、ペシャール大学卒業。またエジプトのアズハル大学で修士号を取得。彼の父親もまたイスラーム学者であり、JUIの党首でもあったムフティー・マフムード (1919-1980)。ファズルッラフマーンが27歳の時に父親が亡くなり、その時にJUI党首の座を受け継いだ。彼は親タリバーンの政治家としても知られている。
- (2) PDMは反政府運動として各政党が結託していたが、2021年4月にPPPとANPが離脱した。<https://www.dawn.com/news/1616074/pdm-splits-as-five-parties-to-form-new-bloc>(以下インターネット上の記事は2021年6月30日最終閲覧)。その離脱過程については中野勝一氏の2021年4月臨時号が詳しい。
- (3) 冒瀆法 (Blasphemy law) は意図的に宗教を侮蔑したさいに刑罰の対象となる法で、特にパキスタンでは預言者ムハンマドを意図的に冒瀆する者は死刑となる。最近では飯山陽がニースウィークにて本件に関する記事「パキスタンが非イスラム教徒に不寛容な理由」を記している。(https://www.newsweekjapan.jp/iiyama/2020/09/post-11\_1.php) しかし本記事におけるムスリムゆえに非イスラム教徒に不寛容であるという彼女の主張には全く同意できない。確かに残念ながらパキスタンでは多数派のムスリムによる少数派のアフマディーヤやキリスト教徒、ヒンドゥー教徒に対する迫害は存在する。そして、一部の過激な人々が冒瀆法を利用して彼らを貶めるケースもある。彼女はまず「パキスタンの人口の97%を占めるイスラム教徒が冒瀆者は死すべきだと強く信じているため冒瀆法を強く支持しているだけでなく、冒瀆の疑惑を持たれた人物や関係する弁護士、支援者を私刑の形で殺害することもいとわない」としている。この作為的な書き方はあたかもパキスタン人口の97%のムスリムが冒瀆法を支持しているように錯覚させるが、彼女が指摘した元パンジャブ州知事で暗殺されたサルマーン・ターズィルなどの冒瀆法に批判的なムスリムも当然ながら存在する。アーシア・ノーリーンに無罪判決を出した最高裁判所判事たちもムスリムだと考えられるが、彼らも命を狙われるのであろうか？そもそも刑法における死刑の是非に関する議論も考慮すべきである。そして問題の根幹は、冒瀆法の廃止を預言者ムハンマドに対する冒瀆であると短絡的に結びつける思考回路とそのような考え方が広く流布し一度批判をすれば命を狙われる状況にあるのではないだろうか。次にパキスタンが世界人権宣言の宗教に対する権利を認めている一方で、その実態が近代的な自由や人権の理念からかけ離れている原因について、パキスタン人の近代的な自由や人権に対する無知だからではなく、彼らがイスラーム的価値を強く信仰しているからであると彼女は断定している。彼女は「イスラームを強く信仰すればするほど他宗教に対して不寛容になる」と主張したいと考えられるが、果たしてそうなのか。一部の人たちの不寛容さをもってパキスタン人全員が非イスラム教徒に対して不寛容であると言えるのだろうか。全てのパキスタン人は非イスラム教徒である日本人に対して不寛容なのだろうか。加えて、パキスタン政府には宗教問題・異教徒間調和省が設置されており、その名称から世界人権宣言の理念実現を目指していることがうかがえる。この理念の実現には他者との交流が必要不可欠である。他者に対する寛容はパキスタンに限らず日本や欧米を含めた全世界的な課題でもある。机の上で本を読んだり身内で談義したりすることよりも、日常的に出自や文化背景の異なる他者と絶え間なく交流することの方が、寛容さを培う上で重要ではないだろうか。
- (4) 1966年生まれ。パンジャブ州アットク (Attock) 出身。ラーホールの宗教学校を卒業後、パンジャブ州政府のワクフ (イスラーム社会における寄進制度) を管理する部署に勤めていた。元パンジャブ州知事サルマーン・ターズィルを暗殺したボディガードのムムターズ・カーディリー (Mumtaz Qadri, 1985-2016) を支持し、彼の暗殺を正当化していたため職を解任。2015年にTLPを結成。

- (5) <https://www.dawn.com/news/1591262>
- (6) <https://www.asahi.com/international/reuters/CRWKBN27X034.html>
- (7) <https://www.dawn.com/news/1591666>
- (8) <https://www.dawn.com/news/1592407>
- (9) 詳細は以下の記事を参照。伊達聖伸「なぜフランスで「残酷な斬首テロ事件」が起きたのか、その「複雑すぎる背景」：はたしてムスリムとの対立が原因なのか」2020年11月18日。<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/77437?imp=0>
- (10) TLPの活動禁止処分の時系列は以下の記事を参照。<https://www.dawn.com/news/1617844>